

# 2007年第16回長生炭鉱の“水非常”追悼式を行って

長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会 代表 山口 武信

長生炭鉱水没事故の追悼式は、2月3日の災害発生当日の前後3日間に諸行事を行ってきたのですが、関釜フェリーの乗船者数の増加のために、前後1日ずつを増し今年は5日間の日程で初めて実施されました。

また、今年は遺族会の方々に加えて2名の生存者の方、「ソルドスン」さん1918年生まれ（大正7年）及び「キム ギョン ボン」さん1922年生まれ（大正11年）が宇部を訪ねられました。

茨の草むらを通り、昔の坑口の階段のところに生存者のお二人を案内した時、お二人の顔に長い長い間考え思い続けて来た場所にやっと辿り着いたという表情が一時に現れて、お二人に来て頂いて本当に良かったとしみじみ感じました。

この事は、また新しい展開をもたらすのではないかと期待されます。それに加えて韓国糾明委員会、韓国メディア関係、出版関係、渋谷のアートン社、チャンゴ演奏者と、各関係の方々の参加があり、この受入れに“水非常”会員の高齢化と若い実働要員の不足、日程が2日増えたため、経費も人員も不足ということになりました。自動車の調達も井上善兼さんにご苦勞をおかけしました。

追悼式に対する文化の違いが、音楽の扱い一つをとってもなかなか許せないことも分かりました。今回は様々な思いが錯綜して、それでも何とか一応解決点を見出すことができました。皆さんの善意がそういう結果を生んだのだと思います。とにかく多額の経費が必要です。街頭募金にも力を尽くす時がきたようです。



海岸でアボジ！と叫び献花する遺族

記者会見で当時の証言をする生存者



刻む会

たより

No.34

2007.7.1

長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会

代表 山口 武信

事務局 宇部市常盤町一の九 宇部緑橋教会内

TEL 0836(21)8003

事実を後世に伝えたい

孫成姫 (主婦)

私は、水没事故、犠牲者の大多数が同胞だったという事実には大きな衝撃を受けた。現地の海底にはいまだ埋まったまま発掘すらされず、眠る遺骨のことを思うと、胸が痛んだ。事故から65年の歳月が過ぎたにもかかわらず、この事実をよく知らずにいた私は「すまなかつた」という自責の念に駆られた。

今年追悼式には、65年ぶりに2人の生存者が南から参加した。遺族らとの交流会では生存者の金景峯さん(84才)と薛道術さん(89才)が事故の様子を生々しく証言をした。

証言を聞きながら、他界したアボジの記憶が蘇った。アボジは1940年、17才の時、「徴用」で日本に連れて来られ、日本各地の炭鉱、ダム工事現場で危険な強制労働を強いられ逃亡した。動物以下の待遇を受けた話を思い起こさずにはいられなかった。初めて会った2人の生存者は、まるで自分のアボジのように懐かしく、身近な存在に思えた。人の顔に刻まれた深いシワを見

つめながら「アボジが生きていたら、無念の思いを少しでも解いてあげたかった」と強く思った。

何よりも1991年から今日まで追悼式を続けてこられた「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」の地道な活動に心から感謝したい。

日本が歴史を歪曲、逆行し、在日同胞の正当な権利までも剥奪しようとする今の情勢の中で、長生炭鉱同胞犠牲者、遺族、生存者の「恨」を少しでも解くことができるよう、今後この事実を風化させず、後代に伝える努力をしたい。(朝鮮新報より転載)

### 2007年度遺族招聘カンパ会計報告

4月25日現在

#### 収入

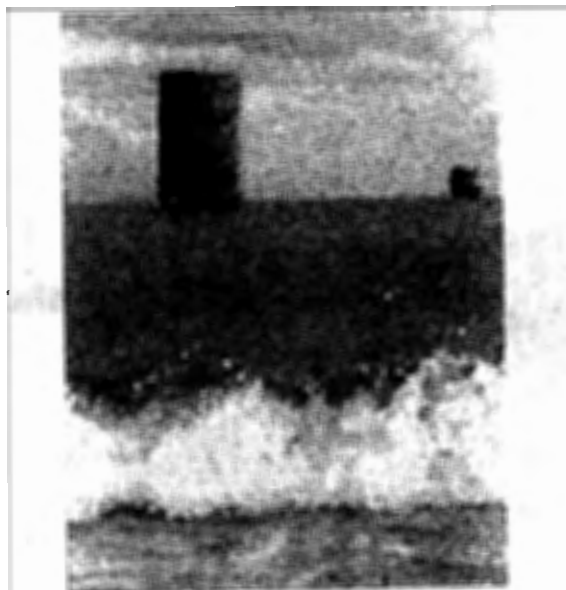
遺族招聘カンパ	550,870
追悼式現地カンパ	26,420
収入計	577,290

#### 支出

遺族招聘 旅費	240,000
遺族招聘 宿泊費	191,755
遺族招聘 食事代	141,731
きらら交流館使用料	2,490
西光寺寸志	10,000
追悼式市民交流会	43,431
歓迎交流会	99,446
秋芳町秋吉台	13,200
雑費	13,550
レンタカー諸経費	106,644
支出計	862,247

※収支決算 284,957 円赤字

引き続きカンパをお願いします！



第二日、金会長・楊副会長・金副会長・朴道寅さんの案内で慶州観光へ。私達へのもてなしであり恐縮してしまふ。途中のパーキングエリアで朝食。ここでもバイキング形式。私は大きな秋刀魚を取る。焼きたてで美味しい。ここで大野・山内一家と別れ、高速道路を飛ばして目的地へ向かう。

慶州は、紀元前五七年から九三五年まで新羅王朝の都として約千年間栄えたところ。奈良の姉妹都市。今は人口約三〇万の静かな田園都市。古墳群と桜並木が目をひく。

先ず国立慶州博物館に行くが、月曜日とあつて生憎

休館日。ぼつりぼつりと雨が降りだしたが、新羅の文武王が三国統一を記念して六七四年に造った離宮・臨海殿址へ向かう。雁鴨池と称ばれている庭の池は何とはなしに朝鮮半島の形をしている。

次は、有名な古墳公園・大陵苑。円墳の内部が見学できる天馬塚で、天皇家の遺品とばかり思っていた金の王冠等が陳列されているのに驚いた二〇年前を思い出した。芝に覆われた半円形波打つように並び、赤い実を鈴なりにつけた山椒の木々、折からの雨に濡れながら感慨一入であった。

昼食は、蓼鶏湯（サムゲタン）。若鶏の腹の中にご飯・蓼・ナツメ・ニンニク・栗等を入れて煮込んだ料理である。初めて食べる者ばかりで感激。

午後からは、仏国寺とその奥にある石窟庵へ。両方とも世界遺産に登録されている。仏国寺は、秀吉の朝鮮出兵の時に焼かれ、今の建物には再建されたものだが、土台の大きな石には当時の焼け跡が残っていた。雨のなか石窟庵への三kmの道を歩いたのもよい思い出になった。仏国寺のすぐ近くに、今年三月、三百名の信徒が長生炭鉞犠牲者の位牌を作つて宇部を訪れて法要された法然寺の法堂があつたが、日も暮れかかつていたので、車窓から拝見するしかなかった。

雨と渋滞に苦しみなながら、高速道路を走って釜山の金会長宅へ。金会長は、繁華街で河豚鍋店を経営しておられる。ご夫人と共に私達一行を歓待してくださつた。河豚鍋は、日本の河豚ちり

と違って、長いもやしと河豚だけの鍋料理である。体が温まった。泊まるホテルは金会長のお店の前。ホテルに引きあげたのは十時半頃ではなかったらうか。

翌日は、釜山観光。釜山は、人口約三八〇万の、ソウルに次ぐ大都市。実は、当初の計画では、昨日のフエリ―で帰国する予定だったのだが、切符がとれず、帰りが一日延びたのである。今回の通訳者としての労をとって頂いた褒さんは、ソウルからの空路で帰国されるのでお別れ。残った山口・島・井上・澄田の四人は、『刻む会』事務局を担当してくださっている山内さんの友達の友達という金福女さんの車で出掛ける。金さんの運転も女だてらに（失礼！）なかなかの腕前。釜山の交通量ではレンタカー

を借りても立ち往生するだけだ。私達は、行き先を金さんに一任した。

私達は、郊外の金井山城跡を横目で眺めつつ梵魚寺へ向かう。この寺は、六七八年に建設された禅宗の総本山である。幾つかの法堂では数十名の婦人方がお経を唱えながら熱心に礼拝していた。私は、日本とは違う仏教の姿を見たように感じた。ご遺族が法然寺に位牌を安置された気持ちが少しばかり解ったように思えた。

井上さんが一足先に博多經由で帰国されるので、釜山港に。ターミナル三階の食堂で昼食。ピビンパとチヂミを食べる。日本より安い。井上さんを送って、私達三人は、再び市内観光。金さんは、国連墓地・市立博

物館・小西行長城・国際市場・チャガルチ市場に連れて行つてくださった。私は、朝鮮動乱の時、たくさんのトルコ兵が戦死したことを知らなかった。また、釜山にも「和館」が存在していたことも教えられた。市場は広く、品物の豊富さと人の多いのに驚いた。値段も安い。

金さんの携帯電話に金会長からの電話が入り、港まで送りに来たいとのこと。私達は恐縮して、もうご挨拶してお別れしたのだから、と繰り返し断ってもらった。私達が、乗船締切時間を大幅に超えて釜山港に到着したら、金会長と朴さんが来ておられるではないか。私達は挨拶もそこそこ、来年二月の追悼集会での再開を約束して、乗船口に駆け込んだ。

## 欠けた赤煉瓦

妻 学 泰 さん

(ペハクテ 広島市在住チャンゴ演奏家)

私の机の上には玉子くらの欠けた赤煉瓦がぼつんと置いてあります。もう煉瓦とはいえないぐらい色あせて角はなくなり、見るからにみすぼらしい破片です。何かもの悲しさを感じさせてくれるのですが、じっと見つめていると涙が出そうになります。そんな赤煉瓦との出会いをつくってくれたのは井上洋子さんでした。ある事で通訳を依頼され知り合ったのですが、彼女はボランティアで長生炭鉱水没者追悼の会の世話役を担っていたのです。

彼女は私に今年も式典があることを教えてくれて、数少ない生存者の中から2名が韓国から来られると言われました。そして全く奉仕という前提つきで韓国の太鼓チャングを演奏してくれないかとすまなそうに言うのです。

私は二つ返事でOKを出しました。私が快くすぐ返事をしたのはそれなりの理由があったのです。私の父は戦前に「募集」という名目で日本に連行され、宇部の炭鉱で

働かされていました。石炭掘りは人間扱いされませんでした。あげくには作業中の事故で左手を失いました。仕事ができなくなった父は夏みかん二袋で解雇されました。

その後の父はどこへ行っても「片端」(かたわ)「猿公」(えてこう)と言われ、大変悲しい思いをしました。血が滲み出るような苦勞という言葉があります、私が小学生ころまで父はもぎ取れた腕から血をとると垂れ流しながら働いていました。その後ろ姿は小さな私の胸に深く傷として刻まれました。

反面、父はよく食べよく飲みよく笑い、歌ったり踊ったりするのが大好きな人でした。またしょっちゅうあれやこれやと議論していました。そんな父はすでに他界しましたが、若き父が過ごした宇部に一度行ってみたくて思っていました。そんな矢先に井上さんと出会い、宇部行きを即座に決めたのです。

宇部炭鉱があった岐波海岸は意外にもとても綺麗なところでした。波はおだやかで海水は透き通っていました。あまりにも秀麗な平穏なので65年前の大惨事は何も

なかつたかのような錯覚を覚えました。

長い間、海中に寝たままの死身は、海水できれいに洗い清められ、彼らの怒りと呪いは天にも届くことなく、そう思った一瞬、遠くに見える水平線も間近かに映る砂浜もなんの意味もないような虚しい存在に感じました。

そんな私の目にふと入ったのが小さな赤煉瓦の欠片でした。波がうつたびに抵抗もなくころころとまくれ、返せばまたまくれるのです。ただただなすがままに時を過ごす赤煉瓦の破片は、哀れにも思い悲しくも思い、なぜか懐かしくも思えました。

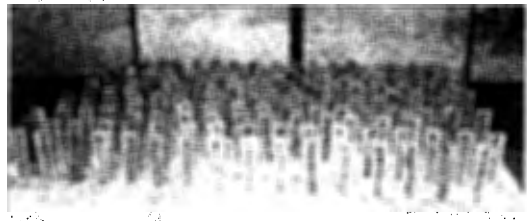
どういう理由で宇部の海岸に流れ着いたかは分かりませんが、その小さな破片は私に全てを語りかけてくれました。65年前の犠牲者の血と叫びと呪い、そしてさまざまの怨念を……。また手を合わせ花をたむけ追悼し続けてきた名もなき心やさしい人々のことを……。

私は赤煉瓦の破片をポケットに入れて持ち帰りました。私はそれを一生身から離すことはないと思います。そして又宇部の岐波海岸を訪れようと思っています。



フィールドワーク

# 海に沈んだ炭鉱



事故当時急きょ作られた犠牲者の位牌

**7月28日(土)10時 宇部市西岐波「西光寺」に集ろう**

**知ってほしい！ 歴史の真実 今もなお183名の遺体は海の底！**

1941年7月突然押しかけた日本警察によって、わけも分からないまま、長生炭鉱に連行された。

水没事故が発生した1942年2月3日午前9時半頃、金氏は前日午後5時から続いた16時間の採炭作業を終えて、宿舎に帰る途中だった。

「突然坑口付近で『水非常が起こった』』という声が聞こえて、後ろを振り返ると、海上

ににゅっと出ている換気口から黒い煙と水柱が吹きだしていた。」おとなの腰の高さ程しかない狭い坑道のつかい棒が水圧に耐えられず崩れて、海水があつという間に坑道全体を満たした。炭鉱側は近隣の村が浸水する危険があるといつて、炭鉱の入口を塞ぎ、当時坑道の中にいた強制徴用者らは1人も脱出できなかった。

韓国在住の長生炭鉱生存者 金景鳳氏

## 長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会

代表 山口武信

事務局 宇部市常盤町1-1-9

TEL 0836(21)8003



今年も韓国から遺族が訪れ、県や市への要請行動や西岐波の現地での追悼式に参加した